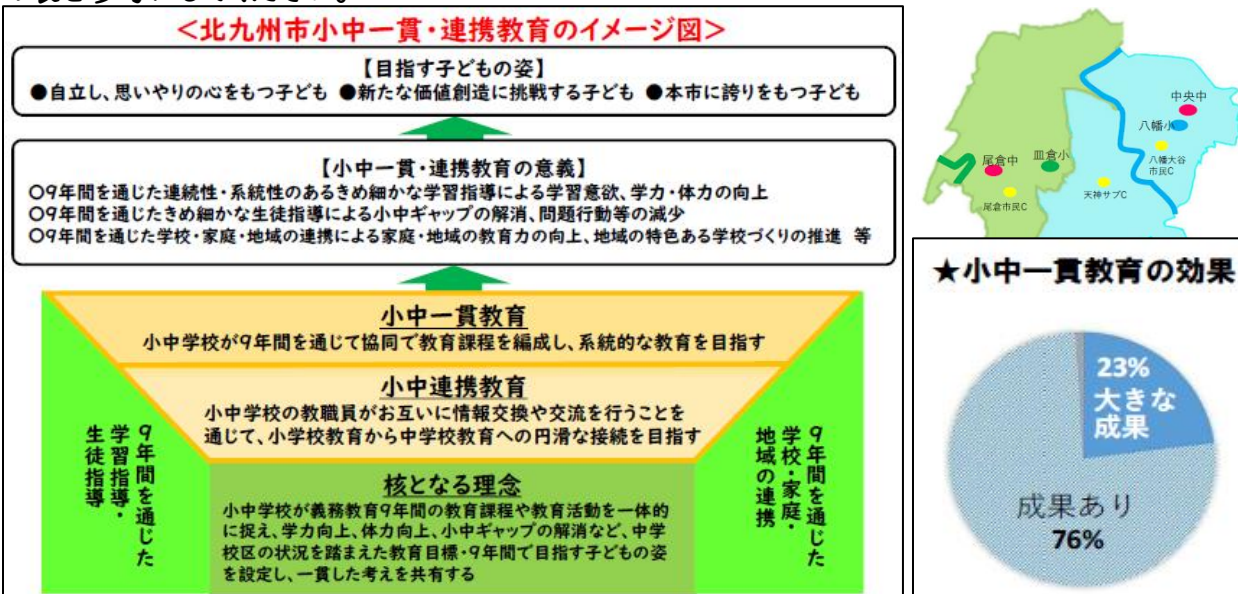




小中一貫・連携教育モデル校区の取組②

「小中一貫・連携教育」モデル校の概要については、第161号でお伝えしたとおりです。この取組は、「北九州市小中一貫・連携教育基本方針の改訂」に基づいています。イメージとしては、以下の表を参考にしてください。



尾倉中学校 小中一貫教育として、やってみたいこと(生徒アンケートから)

【3年生】

○遠足 ○小学生に部活動体験 ○小学生に校舎紹介 ○合同運動会 ○本の読み聞かせ ○一緒に学習する
○体育大会に来てもらう ○中学生が小学校に行って勉強を教える(教師体験) ○合同地域探検 ○合同職業体験 ○中学校に来てもらったの授業参観 ○合同清掃活動 ○部活動体験 ○文化活動発表会の観覧 ○学校探検 ○あいさつ運動 ○花いっぱい運動 ○先生交換 ○弁当をみんなで食べる ○地域の草むしり ○お楽しみ会 ○中3小6が協力し、目標を設定して達成する(運動会や勉強など) ○合同皿倉登山 ○地域の餅つき ○小学校(企画委員会)と中学校(生徒会)での話し合い ○一緒にランチタイム ○合同マラソン大会 ○ドッチボール ○歌を歌う ○学校を使ってのかくれんぼ ○ボードゲーム大会 ○なんでもバスケット ○ドミノづくり ○合同リレー ○合同ミニ運動会 ○小学生の疑問解消会(中学生が答える会) ○ミニクラスマッチ

【2年生】

○一緒に昼食 ○中学生が授業を教えに行く ○千羽鶴作成など小学校と合同でする ○作品の相互鑑賞会 ○部活動体験 ○学年ペアをつくりいろいろ活動する ○一緒に給食 ○中学生が小学生に中学校生活を教える機会をもつ ○合同遠足 ○グラウンドで遊ぶ ○地域のごみ拾い ○中学校生活の体験(小学生が) ○学校近くの清掃活動 ○おにごっこ ○だるまさんがころんだ ○合同レクリエーション ○合同ディスカッション(環境問題など) ○合同地域探検 ○合同体育祭 ○一緒に地域に花を植える ○映画を一緒に見る ○一緒に料理 ○たくさんの絵を黒板に書く ○合同グループを作り SDGs 調べ学習及びプレゼン会をする ○小学生と一緒にダンスを作る ○ハンデありのかけっこ ○歓迎合宿 ○皿倉登山 ○球技大会 ○リレー大会 ○本の読み聞かせ ○響ホールでコンサートを見る ○防災の取組と一緒に避難訓練 ○お互いの自己紹介 ○リモートで中学校の授業見学 ○合同百人一首 ○バレーボール対決 ○全員リレー

【1年生】

○交流会 ○お互いの校舎掃除 ○町探検 ○体験部活動 ○理科の実験 ○一緒に授業を受ける ○合同行事 ○合同劇 ○合同演奏会 ○散歩 ○草むしり ○マラソン ○鬼ごっこ ○本の読み聞かせ ○ドッチボール ○だるまさんが転んだ ○花を植える ○動物園に行く ○山田緑地に行く ○皿倉登山 ○勉強を教えに行く ○校舎見学 ○中学校の紹介を小学生にする ○スペースラボに行く ○ボランティア活動 ○合同修学旅行 ○合同スポーツ大会 ○学校の中でかくれんぼ ○合同クイズ大会 ○小学校企画委員会との話し合い ○歓迎遠足 ○校外学習 ○ノートの作り方講習会 ○文化学習発表会に招待 ○小学生に部活動説明会

【4組】

○合同で遊ぶ ○野球をしたい ○農業体験を小学校としたい ○ドッチボール ○遠足 ○運動会の競技の一部に入る ○演奏会(ひびきホール) ○草抜き ○公園で遊ぶ ○一緒に美術館 ○弁当を一緒に ○鬼ごっこ

生徒のみなさんからたくさんのアイデアが出ました。全部できるわけではありませんが、尾倉中と皿倉小学校の先生たちで決めていきたいと思います。中学生として小学生と交流するときのキーワードは「目的意識」です。「何のために小学校と関わるのか」を各自で理解して参加するととてもいい取組なると思います。頑張りましょう。

では、なぜ小中一貫・連携教育が必要なのでしょう。

6・3制が始まった戦後からの変化で子どもの発達の早期化が挙げられます。小学校高学年で問題行動が発生する傾向にあり、これまでの小学校の体制(担任)だけでは対応が困難な事例も多く見受けられます。また、教育活動の差異、人間関係や生活の変化による精神的・身体的負担といういわゆる小中ギャップも問題になることがあります。指導体制が変化し、学級担任による指導から教科担任制かつより専門的な内容へ変わります。そのため、勉強についていけなくなる生徒も増加します。さらに、小中学校の教職員の連携・相互理解の重要性です。小学校段階でのつまずきがあるまま学習が進行し、それが学習意欲の低下に繋がっているケースが見受けられます。小中学校の学習指導の系統化が十分に図られない状態が継続していることが理由として挙げられます。

これまで、全国的に「小中連携教育」に取り組んできましたが、学校間の移動時間の関係や、校時の違いによる調整が困難である等の理由から、単発的な交流行事で終わりがちでした。

したがって、教育は一つの学校種の中でのみ完結するものではなく、学校と地域が協働して子どもを支えるという共通認識をもち、小中9年間で一貫した学習指導・生徒指導を行い、小中ギャップの解消や学習意欲の向上を目指す、小中連携教育から小中一貫教育への転換が必要であるといえます。

本市の小中一貫教育モデル事業で目指すこと(期待する効果)は、以下のように要約できます。

- ◎ 小中学校の教職員がチームワークで子どもを支え、小中ギャップの解消につなげる。(組織体制の見直し、小学校での一部教科担任制、9年間を通じたカリキュラム等)
- ◎ 異学年や異なる学校種との交流を通じて、コミュニケーション能力の向上を図るとともに相手の気持ちを考えて行動できる子どもを育てる。
- ◎ 地域とタッグを組んだ学校運営により、子どもたちが地域に見守られて安心して育ち、成長し、将来に地域の担い手となる環境を整備する。